



ききがきすと・シニアライフコーディネーター 清水 正子

◆関東SLAの講座から出発

きっかけは関東SLA主催のシニアライフコーディネーター講座でした。この講座を通して、あまりに知らなかったシニア問題全般について、目からうろこの思いがしました。これからの自分がどんな世界に入ろうとしているのか、また、それにあってどのような知識を身に付け、努力しなくてはならないかを思い知らされました。

◆「ききがきすと」との出会い

さらに、この講座の講師を務める松本すみ子さんの「ききがきすと活動」を聞いたとき、漠然と何か社会の役に立つことができないか模索していた私は、まさに、これこそ自分が求めていた道である！と確信できました。それからは「ききがき」の基本である傾聴の勉強を始め、本を読み、実践を兼ねて、品川区の傾聴ボランティアにも応募し、以来2年余デイサービスのお年寄りと茶飲み話を続けています。そして、「ききがきすと」の資格も取得しました。

◆「ききがきすと」養成講座の目的と内容

NPO法人シニアわーくす Ryoma21 が毎年1回開催する「ききがきすと」養成講座は、語り手の話にじっくり耳を傾け、語り手に代わってその話を「その人なりの自分史」にまとめて、小部数を手作りして発行する資格です。依頼者からは多少の原稿料、編集・製本費を頂きます。

◆お年寄りの話は面白い

お年寄りは話の上手な方が多く、貴重な昔話には興味が尽きません。銀座のど真ん中で育ったある人は、幼い頃からコーヒーの味にうろさく、コーヒー豆店のご主人にも一目置かれていました。味見してまずいものはまずいと言い切り、大人を閉口させたと話してくれました。

湘南の「あんこ屋」に生まれた人は、職人さんたちが大きな木の樽に仕込んだあんこを一晩中こねつけて、夜明けまでに仕上げるために立ち働く声を聴きながら床についた、と感慨深く語ってくれました。

◆話し手の目の輝き、聴き手のよろこび

よく言われるように、昔話をするとお年寄りは元気になるというのは本当のことで、話し続けているうちに、次々と普段心の隅に眠っている思い出や感情が湧きあがってくるようです。どの話し手も目が輝き、遠い日々のことを嬉しそうに口にします。聴いているこちら



もその世界に引き込まれ、ああそんなことがあったのだ、そんな人の暮らしがあったのだ、という感慨にとらえられてしまうのです。

◆聴くだけでは残らない

ただ、聴くだけでは、お互いに嬉しい気持ちだけで終わってしまいます。語り手には、自分とは何か、どんな生き方をしてきたのか、他人に語った人生を、写真とともに保存されたストーリーの冊子として見返すことで、自分の軌跡を自分で確認し、身近にいる人たちに理解してもらえます。「ききがき」には計り知れない効用があると信じています。

◆つまらない人生なんてない

多くの方々の話を伺うと、みんなそれぞれ懸命に立派に生き抜いて、それだからこそ「現在のその人があるのだ」と痛感させられます。

この貴重な個人の苦労や努力の事実を、しっかりと語り伝えることこそ、あとに続く若者への一番の教育ではないでしょうか。

一方的に押し付ける説教ではなく、さりげなく語りかけるかたちでいいのです。どんな人にも、つまらない人生なんてひとつもない、と「ききがきすと」として実感しています。

